

北海道の将来を考える

～地域計画づくりに多様な意見を反映させる手法の確立と、北海道の魅力ある暮らしを実践するために～



北海道開発協会では、北海道命名150年の節目を迎えた2018年に「北海道150年の開拓と開発に関する研究会」に助成をしています。研究会では「少子高齢社会における地方創生のシナリオを模索・実践する」道しるべをつくることを目的に、北海商科大学の田村 亨教授を座長として北海道都市地域学会の30～50代の研究者やさまざまな実務に携わる幹事と10名ほどのメンバーによって、「北海道の将来を考える勉強会」を開催しながら北海道の将来展望について議論しています。

勉強会には、国や地方自治体が策定するさまざまな計画の立案段階で、ファシリテーション技術を導入できないかという試みもあります。計画立案から参加性を高めることで、行動が変化して計画の実現性が高まって、より住み続けたい地域になっていくのではないかと。そのことが北海道の将来をよりよい姿に導いていくのではないかと。背景にはそんな想いがあります。

そこで、今回は幹事に集まってもらい、勉強会で実践してきたワークショップの手法で、今までの振り返りとこれからの取り組みについて議論していただきました。

出席者（五十音順）

- 小山 茂 氏 札幌大学副学長
 鈴木 卓真 氏 TEDxSapporo代表、(有)テックワークス代表取締役
 宮川 愛由 氏 京都大学レジリエンス実践ユニット特任准教授、
 (一社)北海道開発技術センター参事

ファシリテーター

- 山田 菊子 氏 東京工業大学環境・社会理工学院研究員

※本ワークショップは2019年5月16日に開催しました

自己紹介

山田 これまで勉強会では、10回の幹事会とメンバーを集めたワークショップを2回開催しました。実効性のある意外なアイデアを楽しく得る方法を確立して、計画立案に生かせないかという思いで、これまでの勉強会を開催してきました。今日はその手法を実践します。まず、皆さんの自己紹介をお願いいたします。

宮川 大学院を卒業後、京都で交通政策や計画づくりなどコンサルティングに関わる仕事をしていましたが、出産を機に北海道に戻ってきました。今は札幌を拠点に、道内の計画づくりや学校教育に関する研究活



宮川 愛由氏



鈴木 卓真氏

動に参画しています。これまで住民に計画をわかりやすく物語的に伝えていく方法の物語研究*をしてきました。勉強会には、北海道から発信できる新しい計画づくりの手法を確立できるのではないかと期待しています。

鈴木 生まれも育ちも北海道で、道外で暮らしたことがありません。出張で道外にも行きますが、住んでみたいと思うまちはなく、好きだから北海道に住み続けています。

小山先生に誘われて勉強会に参加しました。きっかけは、代表を務めているTEDxSapporoの活動です。これは、いろいろな人のアイデアを共有して価値を発信していくプレゼンテーションイベントで、北海道からアイデアを発信したい、次の世代のリーダーを育てたいという思いから関わっています。この勉強会と共通する要素があります。

小山 札幌大学女子短期大学部助教授就任を機に、北海道に来ました。専門は土木工学ですが、プランニングの研究をしており、今は札幌大学の所属です。本学は2013年に地域共創学群を開設しました。昔から、大学は地域に必要とされる活動をするべきだと考えていました。大学の社会貢献は、まず地域の中で活躍できる若者を育てることです。学生にも共感してもらえるような、熱い思いを持っている人たちの意見やアイデアを、この勉強会から発信したいですね。

山田 夫の転職をきっかけに北海道にやってきました。住んでみると涼しくて空気がきれい、のんびりしていて、気に入りました。北海道は、高校時代に1年間住んだアメリカのウィスコンシン州に似ています。どちらの人も冬の外出のとき、自分の命を守りつつ出かけていくという覚悟を持っています。そんな緊張感

と北海道の風土が大好きです。

人間を中心にして計画を立てる方法を人間中心設計と言います。私は、企画の段階から使う人の状況を観察するこの考え方を、計画や構造物を造るときに役立てる研究に取り組んでいます。この勉強会で研究の一部を実践するという期待をもって参加しています。

皆さんのお話から、勉強会へは二つの期待があることがわかりました。一つは、これまで土木の中ではなかった研究が現実味を帯びていくこと。もう一つは、若者育成など北海道の将来に役立てていくことです。

セッション1～これまでの振り返り

山田 通常の計画づくりでは、有識者などで構成される委員会などで意見をいただくわけですが、それは本当に反映されているのでしょうか。一市民として意見を出すパブリックコメントも同じです。また、どうやって意見を引き出すと、より実現性のある計画づくりができるのでしょうか。そんな疑問から、有識者の方々にも一市民の視点、自分のこととして考えてもらって、意見を引き出す方法を勉強会で考えてきました。有識者が専門性を生かしながら自由に意見を出し合う計画づくりは、あまり例がないと思います。そこで、本日も、その試行として行ってきたワークショップと同じように進めていきます。最初のテーマは、これまでの振り返りです。

今までのワークショップでは「地震を経験した今、北海道の将来を考える」と「冬を終えた今、考える北海道の未来」をテーマにしました。振り返っての感想や心に浮かんだ感情について、ポジティブなことを黄色の付箋に、ネガティブなことを青の付箋に、それぞれ3つ以上書き出してください。いつもどおり4つの

※ 物語研究

神奈川県小田原市では、まちが歩む可能性のあるプロセスを施策ごとにストーリーで描く作業を行い、市民が現実をより身近に捉えて、市民と行政の役割や行動をイメージできるようにしている。<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/municipality/vision/sinariplanning.html>を参照。



小山 茂氏



山田 菊子氏

ルール（「ワークショップの4つのルール」参照）を進めます。

— 5分間で付箋に書き出し、発表へ—

山田 では私から。初回のテーマを地震にしたことで、自分ごととして捉えられ、とても良かった。思った以上にアイデアは出ると実感しました。また、気難しく見えた方からもたくさんの意見を聞き出せました。未来はモノではなく人だと改めて認識しました。

宮川 私も参加者が生き生きと楽しそうで、驚きました。会議では自分の専門分野の意見を言わなければとの思いにとらわれがちですが、ワークショップではそれがなく専門性は関係ないと思いました。

山田 それは「自分ごと」だからですか。

宮川 はい、特に地震のテーマ。参加者にはテーマだけしか伝えていなかったのですが、準備なしでも意見やアイデアがたくさん出て、短時間でよくまとまりました。私のチームは、道内外の出身者が同じくらいの割合で、外から見た北海道や海外をよく知っている人から見た北海道など、多彩な視点で北海道を考えることができました。

鈴木 私も多様な視点があると実感しました。問題意識を共有してみると、問題の捉え方が違うこともわかりました。自分ごとで考えた成果です。

ワークショップの4つのルール

「北海道の将来を考える勉強会」で議論の根幹と定めているルール。

- ①一般論ではなく、自分のこと（自分ごと）として考えること、
- ②発言内容はテーマから離れないようにすること、
- ③他人の意見は否定しないこと。ただし、他人の意見を利用することは可、
- ④意見の質よりも意見の数を追求すること、の4点

小山 私も多様な視点を感じ、視点の違う意見に共感もできました。自分の行動を変えたいと思える意見もたくさんありました。夢を語る参加者の情熱というか、熱量が高い、すごい会だと思いました。

山田 出席しているメンバーによるのでしょうか。

宮川 メンバーには大学の先生もいましたが、行政主催の会議であのように盛上がるのでしょうか。

鈴木 方法論として、自分の意見がきちんと言える環境をつくったことが良かったのでは。

小山 今日のような進め方が良かったのでしょうか。

鈴木 最低でも付箋3枚は書かなければと思うと考えるし、各自、発表の機会があることも良かった。

宮川 みんなが白紙からスタートすることも。

山田 方法論の成果ですね。ここまでの意見をまとめると、楽しそう、生き生きと参加してくれた、熱量がすごい、アイデアがたくさん出た、アイデアをもとに行動が変わりそう、専門性は関係ない、自分ごとにした、共感できるアイデアがあったなどでしょうか。一方で、多様性が見えてきたという意見もありました。これも方法論の結果でしょうね。

宮川 もし委員の立場になると、こういう意見を期待されていると、あらかじめ考えてしまうこともあるでしょう。

鈴木 いわゆる予定調和ですね。

山田 ワークショップでは、予定調和ではない意見が出ました。これも一つの成果です。

ファシリテーター役の印象はどうでしたか。

宮川 あまりコーディネートしなくてもうまく進みました。ポイントは時間の管理だけでした。

鈴木 皆さん、素直にルールを守ってくれて、とても進行しやすかったです。

【参考】ワークショップの進め方とコツ

- 1 テーマを決める。
- 2 進行役となるファシリテーターを入れて5人程度のグループをつくる。
- 3 テーマに沿った意見やアイデアを各自で考えて付箋に書く（所要時間と書く枚数を決めるとよい）。色違いの付箋を有効活用して、わかりやすく！
- 4 書き込んだ内容を各自で発表し、模造紙に貼っていく。発言はテーマから離れないこと！
- 5 全員の発表が終わったら、似ている意見などをグループにまとめ、グループ毎にテーマを書き出し、みんなで共有する。
- 6 まとめた意見をグループ別に発表する。



自己紹介では各自が勉強会に期待することを発表。白板を活用して出てきた意見を書き留めていく

山田 どんな点が楽しかったですか。

鈴木 自分では考えもつかない意見が飛び出してくること、発見です。

宮川 それに乗っかって、また別のアイデアが出てくることもありました。

山田 私もファシリテーター役で参加して、事前にシナリオをつくらなくても大丈夫だと思いました。むしろ書かない方が誘導にならなくて良かった。今までの意見をグループ分けすると、アイデア、自分ごと、ファシリテーター、多様性という4つになります。

次にネガティブな意見を書いた青い付箋を加えていきましょう。小山先生から発表してください。

小山 最初に、札幌だけで北海道のことを語っていいのかどうかということ。それから、皆さんの意見やアイデアを聞いて、皆を説得する必要はないのですが、もっとうまく自分の考えを表現したかったと反省しています。

鈴木 付箋に書けるよう端的に表現するのが難しい。

山田 付箋に書くには、言いたいことを簡潔に伝えるためのある程度の技術が必要です。簡潔な表現が苦手な人の意見をどのように引き出すといいのか、今後の課題です。

鈴木 私は時間が足りなかった。本当に考え抜いた意見になっているかどうか。常に消化不良感があって、もう1ラウンド議論したいと感じました。

自分ごととして考えてもらった理由は、行動してもらいたいから。でも、今の時点では、行動につながっていません。先延ばししているだけ。自分も同じですが、究極のアイデアが出ていれば、行動しているはず。そこを何とかしていきたい。

山田 机上の空論になっているかもしれません。

宮川 私もテーマごとに1回で終わって、消化不良感がありました。形にしているのかどうかも見えないという課題があります。メンバーの誰かが行動を起こしても互いにそれがわかりません。対立を生みたいわけではありませんが、共感だけが集まっています。

鈴木 他人の意見を否定しないルールがありますから。ワークショップでは広げる段階と、まとめる段階があって、まとめる段階で共感の少ない意見がそぎ落とされます。そこからもう1回広げていくと、かなりいい方向に進みます。でも、その過程を経ていません。

宮川 さらに突っ込んで議論すると、もっとアイデアが深まっていくと思います。

山田 私も共感のみで終わっていると感じました。ただ、私は勉強会の目的に行動を変容させることまで考えていませんでした。計画づくりに役立てられるアウトプットだけを意識して、意見をどう役立てていくかについては未開拓です。今までの成果をどこまで手順化できるのか、悩んでいます。

宮川 これまでの成果を、どう評価していくべきか。

山田 そこが不安な点です。皆さんの意見から感じたのは、計画づくりでよく指摘される合意形成について、改めて考えてみる必要があることです。この勉強会の中では、鈴木さんから意見があった、広げてまとめるという過程が合意形成になるように感じました。

鈴木 広げてまとめるという手順をもう少し深くやっていけば、もっと深掘りできるのでは。

宮川 トピックをまとめるときにやっていますが、時間がないので、無理やりな印象です。

鈴木 たくさん出たアイデアをすべて採用していますが、あるアイデアについて深めていくと、どう行動につなげていくかという議論になります。アイデアを実



制限時間内にそれぞれの意見を色分けした付箋に書いていく



現するために何ができるかを話し合うには、もう1ステージ議論が必要だと思います。

小山 グループごとにみんなの意見やアイデアを発表していますが、発表者の主観もあるので、意見やアイデアに偏りがある可能性もあります。

鈴木 みんな義務感があるので、出たアイデアや意見は網羅していました。ただ、それほど議論が熱くならなかった意見もありました。

山田 では、ここでみなさんのコメントを共有しましょう。方法論、方法論から出てきたアイデアに関する意見、運用などが挙げられています。多様性を引き出す方法としては、この手法で良かったと言えます。合意形成とは何かという視点は、今後の重要なテーマですね。グループの意見が発表者の意見と同じか、札幌だけで北海道を語ってもいいのかなど、今後考えていく課題も見つかりました。楽しそうだななど、場を活性化する声はたくさんあり、この点でネガティブな意見はなかったもので、これはうまくいきました。

宮川 方法は良かったのですが、運用はもう少しアイデアが必要です。

鈴木 今後の運用方法は、もうひと工夫が要ります。

セッション2～これから取り組みたいこと

山田 次にこれからやりたいことについて、勉強会の活動外でもいいので、考えていきましょう。

— 5分間で付箋に書き出し、発表へ —

山田 私は、苦手な人たちとワークショップをやってみたい。例えば、研究者同士や官僚の皆さんが自分の殻を破れるようなワークショップ。どんな議論が展開されるか楽しみです。

それから、フラットな関係の中で、コミュニティ

くりを議論したいということ。今日のメンバーは年齢が離れていても、お互いに遠慮がありません。そんなコミュニティのつくり方に発展できないかと考えています。

このまま進めていくと北海道の楽しい暮らしの物語が描けそうです。その派生形として移住者向けのサービスがあります。前回のワークショップで、冬タイヤはいつごろ交換するのかなどの情報がほしいという声がありました。そんなサービスを展開したいし、製品開発につながればもっといい。意見やアイデアを引き出す、この手法をうまく手順にまとめて、北海道モデルにしていきたいです。

鈴木 この勉強会として、大きな意味合いでのモデルケースというか、ロールモデルを紹介したい。例えば、生き方の素敵な人を紹介する。

山田 それはキャリア支援にもつながりますね。

鈴木 そういうモデルがあれば、おのずと札幌が北海道の代表かどうかという議論は不要で、札幌発世界行になるのでは。私たちが発信するもので、使えるものはどんどん使ってもらおう。それが世界にアピールできるものになるはず。それは暮らし方、具体的には地域コミュニティのあり方にもつながって、さらに進めていくと高齢者と子どもたちをいかにつなげるかという議論になっていくのではないのでしょうか。

ワークショップのテーマになった防災は、みんなの問題だったので、コミュニティをつなげていくことが大切だと実感しました。新しい体験をどのようにみんなと共有していくかも重要です。新しい体験は、楽しいことにつながります。初めての経験や知識、新しいこと、楽しいことをどんどん共有できると行動につながる。一人ではできないことは、みんなで行動してみる。



模造紙に貼った意見をグループ分け



この日のワークショップの意見を全員で共有

例えば、この勉強会で農家に話を聞いたり、魅力的な暮らしを実践している人のところで一緒に暮らしてみる。そんな新しい体験を提供できると、具体的に行動を起こしていく人が増えていくと思います。

山田 みんなで共有することが行動につながるということでしょうか。

鈴木 冬の停電と同じ環境をつくって、実際に暮らしてみるとどうなるのか、そんなことを共有して体験してみる。行動を起こすところまで、勉強会の成果として責任を持ってやっていると、今までにない取り組みになります。

山田 責任重大ですね。行動につなげるまでの手順書、方法論にするということですね。

宮川 言いつばなしで終わるのではなく、行動できるコミュニティをつくりたいと考えます。その前にもっと北海道のことを勉強したい。北海道の将来を考える土台になるものをみんなで共有したい。何が強みで、何が弱みなのか。世界の中の北海道や日本の中の北海道、さらに北海道の中で札幌とその他の地域との違いなど、もう少し共有したいと感じています。成果がどのように計画に生かせるかは、もう少し議論した上で考える必要があります。

また、教育をテーマに取り上げたい。少子高齢化の中で、主体的に地域に関わる人材をどう発掘していくかを考えると、北海道の魅力や自然、産業、歴史、地理などを学ぶことで、北海道への愛着を育てていくことが大切だと感じています。

鈴木 私はPTA活動もしており、その中で教育のあり方を変えたいと思っています。子どもではなく、親を変えていかなければなりません。例えば、親も参加したくなるイベントを開催して、そこから楽しく子育て

ができる地域をつくっていきたいのです。

山田 教育というテーマについては、さまざまな意見やアイデアが出てきそうです。

小山 北海道を住み続けられるところにするための方策を考えなければと感じています。そのためには、住民共通のテーマについて、この勉強会のように自分ごととして考えることを繰り返し、まちの将来を話し合える雰囲気づくりをしていく必要があります。

自治体の公共交通の委員会では、住民の意見を集めたり、先進地視察に行ったりします。でも、それより公共交通を必要とする高齢者などのために、今後のことを考えるのが先です。住民がまちの将来を考える中で、施策の優先順位を決めることができないでしょうか。それは教育かもしれません。子どものころからまちのことを考える環境があれば、将来展望から、どういう行動を取るべきかが見えてきます。

まとめ～意見の共有

山田 では、意見を共有しましょう。行動や新しい体験というキーワードがありました。暮らし方など一人ではできないことを共有して、行動まで一気通貫できないか、というアイデアもありました。

鈴木 地域の高齢者や子どもたちの話題も出ました。

宮川 子どもたちを巻き込んだ体験です。

山田 それから、私たちの勉強が必要だと。これは大切なことです。北海道を住み続ける場にするために市民が参加し、考え、行動する、そこから地域の個性が生まれてくるなどの意見がありました。自分ごとで考えるワークショップの経験があれば、施策の優先順位をつけられるのではというアイデアも出てきました。これが私たちの考えている地域計画への展開でしょう。

各テーマを3回くらい掘り下げれば、札幌発世界行、あるいは北海道モデルのような手法論ができるのではないか。アウトプットとして北海道の暮らし方のようなものが出てくるのではないか。まとめると以上のような感じでしょうか。

最終的には、地域計画に反映できるような手法につなげていきたいのですが、そのためにはもっと勉強しなければいけませんね。北海道発で世界に通用するモデルをつくりたいのですが、手法か、暮らし方か、あるいは両方かという悩みがあります。

鈴木 手法はどこでも使えます。札幌のスタイルを他地域でやってもうまくいかないときは、手法をベースにして他の地域で考え直すというスタンスでいいでしょう。

山田 世界に向けた北海道モデルのアウトプットより、手法を発信するということですか。

鈴木 最終的にはそう思います。ただ、出てきたアウトプットは情報発信する価値があります。アウトプットを例に行動してみると、なぜその行動をしているかを考えてくれるはずです。

山田 アウトプットの内容はアイデアだけでなく、行動まで含まれるべきだということでしょうか。

宮川 行動変容についてはアイデア出しにとどめていました。ただ、進めてきた中でそこまで考えるべきだと感じる人が多かった。行動までを含めたアウトプットにしてみたくなくなったということです。

鈴木 一番の不安は机上の空論ですからね。

山田 では、今日の議論をまとめます。

今までの活動を振り返ってわかったことは、参加者からよい雰囲気が出ていた点で、改善する必要はなさそうです。一方で、時間が足りないなど運用の問題、アイデアをどう地域計画に結びつけていくのかという手順の未確立、アイデアが行動につながらないことなどが浮き彫りになりました。

以上を踏まえて、これからやりたいことは防災や教育などのテーマでもう少し深掘りしたいということ、出てきた意見やアイデアは次世代育成やキャリア支援、移住者向けサービスに活用できるのではないかと

いう声も出ました。今後継続していく上で、私たちは北海道のことをもっと学ぶ必要があります。

私たちが考えているアウトプットでは、どう実現するのか、どう変わっていくのかという行動の視点も必要です。行政が策定する計画は、よく絵に描いた餅と言われます。計画をどう実現していくか、住民がどう行動するかも考えなければいけません。最終的には、計画への発展の可能性を目指していきたい。例えば、住民も行政も有識者も研究者もフラットな形で参加できるワークショップが実現できれば、一市民として参加することで、北海道に住み続けるための案をつくり出すことができるかもしれません。自分たちで計画をつくり、自分たちで行動するような教育プログラムまで確立できれば、それが交通政策などの優先順位付けにつながるかもしれない。その都度住民が納得して、行動できるスキームをつくれるのかもしれません。

今日はありがとうございました。

小山 茂 (こやま しげる)

東京都出身、日本大学大学院理工学研究科交通土木工学専攻修了後、日本大学理工学部助手などを経て、2002年札幌大学女子短期大学部助教授。同准教授、教授を経て、2013年から札幌大学教授、副学長。

鈴木 卓真 (すずき たくま)

札幌市出身、北海道工業大学(現北海道科学大学)大学院工学研究科機械システム工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。2003年(有)テックワークス創業、代表取締役就任。北海道科学大学客員教授、札幌大学非常勤講師なども務める。2015年からTEDxSapporoの代表に就任。

宮川 愛由 (みやかわ あゆ)

網走市出身、東京工業大学大学院理工学研究科で修士課程を修了し、(一社)システム科学研究所に入所。その後、京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。京都大学大学院助教を経て、2017年から京都大学レジリエンス実践ユニット特任准教授、(一社)北海道開発技術センター参事。

山田 菊子 (やまだ きくこ)

兵庫県出身、京都大学大学院工学研究科応用システム科学専攻修了後、(株)三菱総合研究所、(株)HVC戦略研究所、小樽商科大学学術研究員、准教授を経て、東京工業大学研究員。東京工業大学において博士(工学)を取得。小樽商科大学、東海大学にて非常勤講師を務める。

「北海道の将来を考える勉強会」に関心のある方、計画づくりに活用してみたいとお考えの方は、幹事の山田さん(kiko.yamada@plan.cv.titech.ac.jp)にご連絡ください。なお、これまでの活動の成果として、論文「多様な有識者による計画立案づくりのための共創の場づくり」を公表しています。論文をご覧になりたい方もお問い合わせください。